内田百閒と房総

石野　博史

はじめに

内田百閒は昭和二十八年に房総に来ているが、実は四泊五日のいわゆる阿房列車の旅をしただけである。宿泊地で多少詳しい記述があるのは、銚子と鴨川ぐらいで、足跡と言えるほどのものはほとんどない。だいたい阿房列車の旅というのは見物をしない。行くことに意義があるという旅である。したがって「房総阿房列車」の文章だけでは話材が不足するので、百閒がたどったのと同じコースを筆者自身たどってみて、昭和二十八年に百閒がいわば特急で駆け抜けた後を、今の時点で鈍行でたどることにより、百閒の旅がどこまで跡づけられるかを見てみようと思う。

話を三部に分ける。まず作品について。内田百閒のことを最近の若い人に聞いても、ほとんどの人が知らないと答える。筆者もよくは知らなかったが、読んでみると、なかなか面白い。麻薬だという人がいるくらいで、一度取りつかれると、なかなか離れられない魅力がある。ただし作品以上に人物が面白い。そこで二番目に人物について。そして三番目に、房総阿房列車をなぞる現代の旅、この三本立てで話を進める。

Ⅰ　内田百閒の作品について

百閒には、日記がなかなか面白いのだが、日記を除くと、二系統の作品がある。一つは怪奇小説あるいは幻想小説とも言うべき小説の系統で、「冥途」がその代表作である。「高い、大きな、暗い土手が、どこからどこへ行くのか分からない、静かに、冷たく、夜の中を走っている。その土手の下に、小屋がけの一膳飯屋が一軒あった。カンテラの光が土手の黒い腹にうるんだような暈を浮かしている。私は、一膳飯屋の白々した腰掛けに、腰を掛けていた。何も食ってはいなかった。ただ何となく、人のなつかしさが身に沁むような心持ちでいた。卓子の上には何も乗っていない。寂しい板の光が私の顔を冷たくする。」

冒頭の一節だけ見ると、別に怪奇的でも幻想的でもない。しかし、先に進むにしたがって次第に話が現実味を失ってくる。主人公以外の登場人物はどうやら生きた人間ではなさそうである。現実と夢とが渾然一体といった感じになってくる。

もう一つが随筆の系統である。『百閒園随筆』から「無恒債者無恒心」の一節を引く。「二十三日の次は二十四日である。今月の平和も、後一日にして尽きるのである。二十五日の当日となれば、実にいろいろな人が現れてくる。教員室の入り口や、廊下の隅に待ち伏せして、一月振りの久闊を小生に叙するのである。弁当屋、自動車屋、本屋、月賦の時計屋、洋服屋等その他筆述を憚るのがある。人物は、亭主、番頭、おかみさん、小僧さん等種種雑多であるけれども、みんな小生の顔なじみである。今年のお正月の初夢に、雨が土砂降りに降っている往来を走っていたら、横町からびしょ濡れになって駈け出してきた洋服屋の月賦小

僧を踏みつぶしてしまった。去年の暮れに払ってやらなかったので、夢の中まで小生を追跡して来て、この災厄に遭ったものと思う。」

百閒が大学に奉職中、借金取りに悩まされた話をユーモラスに描いている。百閒の作品のほとんどは随筆であり、それも身辺雑記である。自分の身の回りに起こるさまざまな出来事やそれに伴う心理などをユーモラスな筆致で描く、これが百閒随筆の特徴と言える。

次に、そういう作品について、専門家がどんな批評を下しているかを紹介する。

[芥川龍之介「内田百閒氏」『文藝時報』第四二号、一九二七年]

芥川龍之介は『冥途』――上述の短編と同系統の作品一八編を集めて一冊にしたもの――を絶賛して次のように書く。「著書『冥途』一巻、他人の廡下に立たざる特色あり。然れども不幸にも出版後、直ちに震災に遭えるが為に、普く世に行われず。僕の遺憾とする所なり。内田氏の作品は『冥途』後も佳作必ずしも少なからず。殊に（略）『旅順開城』等の数篇は戛々たる独創造の作品なり。然れどもこの数篇を読めるものは（略）室生犀星、萩原朔太郎、佐々木茂索、岸田国士等の四氏あるのみ。これ亦僕の遺憾とする所なり。（略）僕は佐藤春夫氏と共に、『冥途』を再び世に行わしめんとせしも、今に至って微力その効を奏せず。内田百閒氏の作品は多少俳味を交えたれども、その夢幻的なる特色は人後に落つるものにあらず。」

龍之介がこれを書いたのは、自殺する少し前である。百閒は龍之介自殺の二日前に借金目的で龍之介を訪ねている。しかしそのときは、龍之介は薬の飲み過ぎで朦朧状態にあり、小銭をもらっただけで帰った。龍之介は百閒に好意を持ち、経済的な援助もかなりしていたようである。

百閒は、漱石の側に長くいたが、その間小説は全然発表していない。ひたすら材料を温めていた。漱石の没後五年たって発表を始めるが、世評は芳しくなかった。

[伊藤整「解説」『贋作吾輩は猫である』河出市民文庫、一九五一年]

百閒の作風は、一つは怪奇性または恐怖性の表現であり、もう一つは笑いの文学である。「その両者はもとこの作家の気質に深く根を下ろした同一のもののように思われる。作品の中でこの二者は時々入り交じっている。」二者の原型は漱石の『夢十夜』と『吾輩は猫である』であろう。この伊藤の説が以後百閒文学の見方に関する定説となった。

[高橋義孝「実説百閒記――わが師・内田榮造先生」『別冊文藝春秋』一九七一年]

「百閒文学を支える三つの柱」は、「諧謔ないしはユーモア」「俳諧的リアリズム」「幻想味」であり、この三つの要素の根底には、悲哀という共通の要素があるとする。高橋は戦前から百閒文学のよき理解者であり紹介者であった。

[三島由紀夫『作家論』中公文庫、一九七四年]

「随一の文章家ということになれば、内田百閒氏を挙げなければならない。（略）百閒文学は、人に涙を流させず、猥褻感を起させず、しかも人生の最奥の真実を暗示し、一方鬼気の表現に卓越している。／何でもよい、百閒の名品を一篇取り出して、芸術品とはこういうものだと若い人に示したい気持ちに私は襲われる。それは細部にすべてがかかっていて、しかも全体のかっきりした強さを失わない。当代まれな純粋作品である。」

三島は百閒の特に文章をほめている。その一方で百閒のような行き方

が、現代の読者にどれだけ理解されるであろうかとも述べている。

Ⅱ　内田百閒の人物について

[伊藤隆史・坂本弘子『百鬼園残像』朝日新聞社、一九八五年]

「百閒先生は稀代の大文章家、大酒家、大美食家、大乗り物好き、大人情家、はては大奇人――として盛名をほしいままにした。かたわら、今でいうサラ金苦・蒸発につながる大貧乏、心身症、親しみ愛した師友や息子の早逝など、耐えがたすぎる悲苦もなめつくした。そして備前岡山をそれこそ限りなく愛し、懐かしんだ。」

岡山に百閒の句碑ができたときに、当地の朝日新聞が百閒のことを連載記事にして、後で本にした。その本の端書きからの引用である。百閒が故郷岡山を愛したのは事実である。そのくせある時期から後、岡山にはほとんど足を踏み入れていない。百閒は言う、実際に岡山へ行くと、自分の持っているイメージが壊れてしまう。自分の愛している岡山でなくなっている。それを見たくないので行かないのだと。しかし一説には、最初の奥さん――大恋愛の結果一緒になった女性で、法律上は百閒が亡くなるまで正妻だった――が岡山にいたからという。百閒は多くの借金を抱え、おまけに子沢山、そのままでは百閒自身にとっても子供にとってもよくないというので、最初の奥さんは百閒を東京に残し、子供を連れて岡山の実家に帰ってしまう。百閒には罪悪感が残り、そのため岡山には行けなかったのだという。

[酒井忠行『内田百閒　百鬼の愉楽』沖積社、二〇〇七年]

酒井忠行氏は恐らく最も新しい本格的百閒研究家であろう。氏によれば、百閒文学の面白さはまずその表現、語り口にある。しかし、それだけでなく、百閒の生き方そのものが作品に劣らず面白いのである。そのことを示しているのが映画「まあだだよ」である。「黒澤明監督の映画『まあだだよ』が一九九三（平成五）年四月に上映された。この映画の主人公のモデルが内田百閒である。法政大学予科ドイツ語教授時代の教え子が主たるメンバーとなって、一九四九（昭和二四）年に、百閒の還暦の祝宴を開き、その翌年から毎年、百閒の誕生日に摩阿陀会を開催した。還暦を祝ってやったのに、この糞じじいまだ生きているのか。『まあだかい』『まあダダよ』というのが摩阿陀会のいわれである。『もういいよ』ということになった時、死亡診断書を書く主治医、引導を渡す菩提寺の住職に挟まれて宴席に座り、昔の教え子たちが、『未だ百閒は死なざるや』と合唱する、奇妙きてれつな祝宴である。」

この摩阿陀会だが、最初は三〇人ぐらいから始まって、次第に参加者が増え、終わりのころは七〇人ぐらいになったという。二十一年続いた。

[森田草平「のんびりした話」『中央公論』一九三二年]

森田草平は漱石門下では百閒の少し先輩で、平塚雷鳥と恋愛事件を起こすなど、派手なところのある人物であった。百閒とは割とウマが合い、法政騒動（後の注参照）で袂を分かつまではごく親しい関係にあった。説教をしながらも、何度か金を貸してくれてもいる。「百閒先生は壮年にして陸軍士官学校の教官と法政大学の独逸語の教授とを兼ねた上に、一週に一度横須賀の海軍機関学校にまで出張して、俸給の総額五百数十円に及ぶという、その当時にあって私どもの仲間の月給の取り大将であった。それでいて絶えず貧乏をしていた。というのは、毎月収入の三分の二乃至五分の四、或いはそれ以上を高利貸に持って行かれるからで

ある。（略）彼は決して道楽をしたわけでも、酒を飲んだのでも女を買ったのでもない、ただ生活が放漫であったからだ。（略）初めて四十五円の月給を取り出した時、彼は既に月額八十円以上の生活をしていた。それが八十円に昇った時は五百四五十円、百八十円になった時は三百円近く（略）足りない所は皆借金になるんだから耐らない。」

［注＝法政騒動］

昭和八年に法政大学で起きた事件。百閒（当時大学予科ドイツ語主任教授）によれば、そもそもの発端は、ドイツ語科を中心とする若手教員グループが百閒らの前時代的な語学教授法に反対し、教育を改革しようと森田草平をかつぎ出して始めた運動だったらしい。運動は大学の人事改革要求に拡大し、当時学監の地位にあった実力者野上豊一郎の解任要求に至る。最終的に野上は辞任するが、この時、彼の解任に反対する予科の教授、講師等四十七人が一斉に辞表を提出するという騒ぎになった。野上豊一郎は翌年復帰し、戦後の法政大学初代の総長になる。一方、百閒は大学をやめ、二度と復帰することはなかった。百閒にとって経済的にかなりのダメージだったはずだが、ちょうどこのころ、『百鬼園随筆』が何十版も版を重ねるという大当たりをとって、百閒は一躍有名人になるのである。

［野上弥生子「日記」（一九二四～一九二五年）］

作家野上弥生子は野上豊一郎夫人。豊一郎は漱石門下で百閒の大先輩であり、百閒や森田草平を法政大学に招いた人物で、上述のごとく、後に法政大学の総長になった。

「内田さんと芥川さんの話をソバできいてゐるとおもしろい。／才気煥発の競争だからである。ひとつもあたりまへのことはいふまいとする競争だからである。／内田さんといふ人間は敏感でもあり中々頭のきく人とおもふが、どうも知識的でない。い、気にお山の大将――それも自分の自由になるハンヰでの――を気取る方らしい。／内田さんの貧乏話をきくと可哀想と共に腹立たしくなる。ひつきよう、彼のデカダンがすべて不幸の原因である。健全に生活することを心掛けなかつたもの、陥るワナにふみ込んでゐるのである。」

［小林安宅（百閒の主治医　談　雑賀進『実説内田百閒』論創社、一九八七年による）］

小林安宅氏は長く百閒の主治医として百閒を身近に見てきた人。「電話で何度も打ち合わせをして、いよいよ今日は往診という日は、朝からその段取りで大変なのです。／まず早早と便所に行って用を済ましておかねばなりません。それが先生のは長いのです。それから部屋の位置を決めたり、診察後の宴会の――このほうが眼目なんですが、その際のお酒の種類は何と何と、お料理は何品作って、どう並べるかということを案じたり、あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、一日中ほとんどほかのことは手に着かないらしいのです。／たとえ五分早くても先生はご機嫌が悪い。まだその心づもりと用意が完備しておりません……。遅れていけばもちろん、いっそういらいらして大変です。／わがまま、ぜいたく、頑固、意地悪、神経質、いろいろ言う人もありますが、またそういう面もあるにはありましたけど、本心は心のやさしい、いい人でした。／先生は若い者の面倒をよく見ました。国鉄では何と言っても平山三郎くん、それから……」

［高橋義孝『サンケイ新聞』一九六一年］

「内田百閒とは如何なる人物か。一言を以て言えば、くそじじいであ

る。（略）こういう憎たらしいくそじじいは、世間にそうざらにいるものでない。……人から何かしてくれといわれても、絶対にといっていいほどに、そのことをしてやらない。自分のしたいことだけしかしない。」

［高峰秀子「夏の次には秋が来て」『おいしい人間』文春文庫、二〇〇四年］

昭和十三年に百閒をモデルにした「頬白先生」という映画に子役として出演して以来の百閒ファン。当時の若者の読む物といえば、志賀直哉とか横光利一などが中心だったが、高峰秀子はとにかく内田百閒だった。子供のまま年を取ってしまったようなナイーブ、頑固、わがまま、いたずらな文章が何とも言えず好きだったという。「『この世で、私が会いたい人って、誰だろう?』いっしょうけんめいに考えた揚げ句に浮かんだ私の『会いたい人』は、なんと内田百閒というガンコオヤジただ一人であった。（略）ある日、私は思い切って金釘流で手紙を書いた。『私は高峰秀子という女優です。内田先生のファンなのです。一度でいいからお目にかかりたいのです。お願いします』。二週間ほどして百閒から返事が届く。「……あなたとは、以前に一度、どこかの雑誌社から対談をたのまれたことがありました。その対談は、なにかの理由でお流れになりました。そういうこともあったので、私もあなたにお目にかかりたいと思います。しかし、私の机の上にはまだ未整理の手紙が山積みになっており、また、果たしていない約束もあります。これらを整理している内に間もなく春になり、春の次には夏が来て、夏の次には秋が来て、あなたと何月何日にお目にかかるということをいまから決めることは出来ません。どうしましょうか。」「私は思わず吹きだした。まるで百閒先生のエッセイそのもののような、ユーモア溢れるお返事だったからである。（略）私は、この一通のお手紙を私の宝物にすることで、百閒先生との会見はきっぱりとあきらめた。」

［中村武志「掘っ立て小屋の百閒先生」『百鬼園戦後日記』ちくま文庫、二〇〇四年］

国鉄で平山三郎の上司。勤務のかたわら執筆した「目白三平」シリーズで一躍有名となる。百閒に心酔し、阿房列車の出発には必ず見送りに現れたことから、阿房列車の文中では「見送亭夢袋」の名で登場している。百閒にはあまり好かれていなかったようだが、最後まで百閒のために尽くした。「百閒先生は、次から次へと頼まれる原稿を断って錬金術に専念する。無から有を生じるような錬金こそ真の錬金術であって、原稿を書いて金をつくるのはだれにでも出来る最も軽蔑すべき錬金術である、と百閒先生は考えている。／百閒先生の錬金術とは、出版社や新聞社を訪れてなにがしかのお金を融通してもらうのだが、それは断じて原稿料の前借りではないので、原稿とは無関係な純粋錬金術の成果であると先生は確信している。／正午過ぎに起き、二時半に朝昼兼用の食事をし、晩酌の始まる六時まで机に向かうが、その間にも琴を弾じ、目白の声に耳を傾け、手紙を書き、訪問客に面会したりしなければならない。それ以外のわずかな時間を盗んで一枚か一枚半ぐらい原稿を書く。そのようにして書きためた原稿を、百閒先生は出版社や新聞社に届けるが、原稿料は全然もらわない。出版社や新聞社の会計係が貸し金から勝手に差し引くのであって、一枚の原稿料がいくらで、差し引き借金がいくら残っているかなどは、先生の全然知るところではない。手許不如意になると、軍手をはめた手にステッキを握り、また出版社や新聞社に錬金に出かける。」

Ⅲ　房総阿房列車（房総鼻眼鏡）の旅を追って

百閒の房総阿房列車の旅程は、まず両国から千葉を通って総武本線で銚子まで行き、犬吠埼で一泊、成田線でいったん千葉へ戻り一泊、千葉から房総西線（現内房線）で安房鴨川へ行き一泊、房総東線（現外房線）で千葉に戻り、千葉は稲毛に一泊して翌日東京帰着というものであった。通った跡が眼鏡の格好に見えるので、別名を房総鼻眼鏡としゃれたのである。

[犬吠埼]

銚子駅に着きタクシーに乗る。時は昭和二十八年十二月、「駅前の広い道を走って行って、道が曲がると屋根の向うに帆柱が見える。海辺かと思ったら利根川の河口に近い川岸であった。黒龍江やアマゾン河を見た事はないし、又それに比べる話ではないと思うけれど、それでもこの河口程の大きな景色は私には珍らしい。向うの沖から太平洋の背の高い波が、波頭に繁吹きを散らしながら逆巻いて来て、利根川の水を押し戻そうとする。」いかにも百閒らしい筆致であるが、タクシーで駅から犬吠へ行く道と、利根川の河口とは逆方向であり、百閒が実際にどこを見てその広さに感心したのかは不明である。

犬吠へ行く途中の描写が面白い。「横手の砂浜から、大きな黒い犬が砂煙を蹴立てて跳び掛かって来た。自動車の車体に噛みつきそうに吠え立てる。吠えながらどこ迄も追っ掛けてきた。その吠え声と浪の音とが一緒になって、車の中で心細くなり、早くお酒が飲みたいと思う。」黒い犬が車に吠えかかったというのは事実であろうか。酒井忠行氏は、犬吠埼＝犬が吠える岬という連想からこのような話を作ったのではないかと言っているが、その可能性はかなり高いように思われる。

続く宿の描写も奇妙である。「宿屋の建物は新らしい。設備も行き届いている様である。案内されて座敷に通ると、途端に頭の中が捩じれて、目先が縺れた様な気がした。奥の間の海に向かった障子の桟が、みんな変な工合に曲がっている。曲げてあるので、捩じらして一つの効果を出そうとしたらしい。心理学の錯覚の円を見る様で、初めて通された者はだれでも面喰らうだろう。」そしてその翌日、「女中を呼んで、山系君にすでに起きている事を届け出てくれと頼んだ。知らない宿の朝、彼がどこにいるかという事は、私には見当がつかない。間もなく雨が上った朝の様な顔をして這入って来た。下の別の座敷で朝食を済まし、もう朝風呂にも這入ったそうである。湯殿の隣りの砂浜の上に、硝子張りのサン・ルームがあって、そこの腰掛けに腰を掛けていると、小さな犬が向うの腰掛けに腰を掛けて、こっちを見たと変なことを云う。」

山系――ヒマラヤ山系――君とは、阿房列車の旅で百閒が用いた平山三郎氏の愛称である。百閒には持病があって、一人で長旅をする自信がないので、だれかを連れて行こうと最初から考えていた。「国有鉄道にヒマラヤ山系と呼ぶ職員がいて年来の入魂（じゅっこん）である。年は若いし邪魔にもならぬから、と云っては山系先生に失礼であるが、彼に同行を願おうかと思う（「特別阿房列車」）。」平山氏は同意し、広報誌の仕事をやり繰りしながら、結果的に十数回に及ぶ阿房列車の旅すべてに付き合った。「そらあすこに犬がいるでしょう。あの犬です」「犬が腰が掛けられるかね」「そうですね、しかし掛けました」。

黒い犬が吠えかかったというのも、小さい犬が腰を掛けたというのも、地名にちなんだ半分冗談のように思われる。平山三郎氏が書いた

『実歴阿房列車先生』には、「先生が阿房列車で記述される文章は、いちいちすべて嘘はないのだが……」とあるのだが。

二人が犬吠埼で何旅館に泊まったかということも問題である。阿房列車の旅では原則として旅館名が書かれない。そのため、千葉市内の旅館などはまったく手掛かりなしだが、犬吠の場合は、およその見当をつけることができる。

犬吠の旅館でまず有名なのは水明楼である。徳富蘆花の『自然と人生』に「大海の出日」という文章があり、次のように書き出されている。「枕をうごかす涛声（どせい）に夢を破られ、起って戸を開きぬ。時は明治二十九年十一月四日の早暁、場所は銚子の水明楼にして、楼下は直ちに大東洋なり。」おそらくはこの文章がきっかけで、水明楼は文人がよく訪れる旅館として有名になった。しかし今はもうこの旅館はなく、跡地に「水明楼址碑」という小さい碑があるのみである。碑の隣には暁鶏館という旅館があり、現在では文人の宿としてはこの暁鶏館が有名である。

昭和二十八年に百閒が泊まった宿屋がどこだったのか、百閒の文章から得られる手掛かりは「銚子の燈台を左手に見て松林の中に這入り、宿屋の裏手の石段の上で（タクシーが）停まった」ということぐらいしかなく、該当する松林も石段も現在見当たらないので、正確には不明と言わざるをえない。しかし、昭和三十二年に址碑ができた水明楼が二十八年当時残存していた可能性は少なく、となれば燈台との位置関係から考えて暁鶏館である可能性がきわめて大きいと考えられる。

暁鶏館にも古くから多くの文人が訪れているが、中では高村光太郎が有名である。光太郎は妻の智恵子と結婚前に暁鶏館で逢い引きをしている（光太郎は偶然に出会ったと言っているが）。どこまでが事実かを別にすれば、光太郎の『智恵子の半生』と佐藤春夫の『小説高村光太郎像』が暁鶏館での二人については詳しい。

水明楼址碑から犬吠埼燈台を望む（背後の建物は暁鶏館）

高村光太郎に「犬吠の太郎」という詩がある。この詩も暁鶏館にかかわりがある。「太郎、太郎／犬吠の太郎、馬鹿の太郎／／けふも海が鳴つてゐる／娘曲馬のびらを担いで／ブリキの鑵を棒ちぎれで／ステテレカンカンとお前がたたけば／様子のいいお前がたたけば／海の波がごうと鳴つて歯をむき出すよ（下略）」。この詩は地元で「長崎の太郎」と呼ばれていた実在の人物をモデルにしたものと言われる。本名を阿部清助といい、旧会津藩士の出で、軽い精神薄弱があり、使い走りとかサーカスのびら配りとか、宣伝の手伝いとか、雑用のようなことをしていた。彼が雨が降るぞと言って通ると、翌日は必ず雨が降ったというエピソードがある。暁鶏館の風呂番に雇われて、皆にかわいがられていたが、昭和十四年、使いに出た時に電車にはねられて死んだ。暁鶏

涙痕之碑

館で葬式を出してもらって、その位牌がかつて厨房の一角に置かれていた。

さて、犬吠に一泊した翌朝、燈台を訪れた（中には入っていない）百閒は番頭から「三富さんの別荘が君ヶ浜にありまして、坊ちゃんがお友達と二人で水死されました」という話を聞く。その時は分からなかったが、「後で知った所によると、私なぞの古い記憶にも薄薄残っている早稲田派の新詩人三富朽葉と、その友達と云うのは今井白楊で、二人は大正六年、共に二十九歳の夏、この君ヶ浜の逆渦に巻き込まれたのであった。あすこにその涙痕之碑が建っていると教わった。」この「涙痕之碑」は現在も君ヶ浜の一隅にひっそりと立っているが、「水明楼址碑」とは違い、二～三メートルはある大きなものである。

三富朽葉はフランス語に堪能で、フランス象徴派からいろいろ学んで日本に紹介した。前途有望な象徴派詩人であり評論家でもあった。代表作として「雨の唄」を紹介しておく。「緑の苔も白みゆく／此の麗しい雨の時／わが指は火の如く／此上ない虹を胸に描く／雨の抛つ蟲の唄／生命の苑の蟲の夢／わが渇く脣は／黄金の春を喉に摘む／又新しく爽かな憂愁の祭禮――／昨日は悲み 明日は死／色も香ひも悩ましく雨に塗れて／花と咲く 魂の花 今日のわれ／おお降り注ぐ淨らかさ 此の生の時――／豊かさ 優しさ 麗しさ 此の雨の時――」

[千葉]

百閒は犬吠埼に一泊したあと成田線で千葉に戻る。千葉での百閒の行動で分かるのは、旅館に入り鉄道の人を呼んで一緒に酒を飲んだということだけである。どこの何という旅館に泊まったのか等は全く不明である。百閒によれば、有名な宿で、銚子の女中も知っていたというが、その後千葉市の都市形態や宿泊事情が激変したため、調べても手掛かりさえつかめなかった。

[安房鴨川]

翌日、千葉から房総西線で安房鴨川に向かう。鴨川では「陛下の行宮になったと云う宿屋」に泊まる。「陛下の行宮」を手掛かりにして鴨川市史を調べたところ、昭和天皇が全国巡幸で百閒と同じ昭和二十八年の五月に鴨川、当時東条村にあった吉田屋旅館に宿泊したという記録が見つかった。吉田屋旅館という旅館は今も鴨川にあるが、当時の吉田屋旅館は現在の鴨川グランドホテルである。そのことは同ホテルのホームページに出ている。別の資料によると、吉田屋旅館は当時鴨川で最も古く由緒ある旅館であった。百閒は、旅館の前で「駅から行った自動車を降りて、輪奐の美に目を瞠った。こんな小さな漁師町に、なぜこう云う立派な宿屋があるのか、私には合点が行かない」という

感想を述べている。

そして通された座敷の縁側から真下の太平洋の波打ち際を眺める。「随分長く遠い渚で、砂の色も明るい。大きな浪が、後から後から打ち寄せて、その砂浜で崩れる。じっと見つめていて、浪は何をしているのだろうと思う。人の脊丈ぐらいあって、大きいけれど犬吠岬の浪の様に怒ってはいない様である。渚に近い海面から、小さい無数の浪がこちらへ打ち寄せようとしているらしい。そこへ沖から大きい浪が来て、浪頭のうしろに小さな波を残し、自分だけ先に来て大袈裟にどどどと崩れる。どう云う料簡だか解らない。東京へ帰って二三日経ってから、ふとこの鴨川や犬吠岬の大浪の事を思い出した。私はもう帰ってきてこうして外のことをしているのに、あの辺の浪は矢っ張り大変な姿勢で、浪頭を振り立てて、大きな音を立てて、寄せては崩れているのだろうと思うと馬鹿馬鹿しい。丸で意味はない。無心の浪と思うのも滑稽である。」いかにも百閒らしい面白い感想である。

明治・大正期の海氣館

［稲毛］

次の日の午後安房鴨川をたち、房総東線で千葉に戻り、千葉から自動車で稲毛に向かう。稲毛で泊まる予定の宿は「島崎藤村、徳田秋聲、上司小剣なぞが来て、小説を書いた家だそうである。尤も看板は同じだが代が変って居り、建物も昔の儘ではない……」これは有名な海氣館のことである。ところが行ってみると、部屋はよくない、騒がしい、女中のサービスも最低である。トイレのスリッパがぐっしょり濡れていて、気持が悪くて履けない。「『貴君、逃げ出そうか』と云ったら、山系君が賛成した。／まだ夜が更けてはいない。稲毛駅から電車に乗った。電車の中で山系は私の神速果敢なる決心を褒めた。永年のつき合いだが、彼から褒められた事はめったにない。」つまり、海氣館には泊まらないで、その日のうちに東京に戻ったのである。（「房総阿房列車」の記述にはないが、平山氏によれば、当夜は百閒愛用の東京駅ステーションホテルに泊まったとのこと。）

百閒には不評だった海氣館であるが、ここもかつては文人の宿として有名であった。明治二十一年、海水浴を利用した療養施設として設立されたが、後に旅館となった。当初は中央に大きな建物があり、そのまわりに小さい建物がいくつも立ち並ぶ、別荘式と呼ばれる立派な旅館であった。

田山花袋の「弟」（明治四十一年）には「今度の千葉の講演には、稲毛の海氣館から僕は通つた。（略）別墅（べっそう）式の小さい家屋が彼方此方松原の中に独立してゐて、なんだか好い感じがする。場所が場所だから、余り好ましい処では無いと始めから思つたが、それでも存外あの家は堅いと見えて、一人の男客には女中が屹度二人づつついて出るよ」とあ

り、別荘式であったことがよく分かる。中戸川吉二の「北村十吉」（大正十一年）には「広い松の生えた庭の中に、ポツポツと建っていた。六畳と八畳の二間の家で、縁側や便所や洗面所が普通の家のようについている」とあり、これもまだ別荘式である。ところが林芙美子『女の日記』（昭和十一年）になると、どう見ても一軒家の旅館である。「わたくしたちは、海氣館と云う海浜旅館に這入つた。秋には泊る客もないとみえて、燈火を暗くして、もう雨戸さへも閉してゐたのをやつと起きて貰つて二階の広い座敷へ通つた。板の襖戸に松と鶴が描いてあり、欄間や壁の腰には青や赤の色硝子がはめてある。明治風な面白い部屋だった。」百閒が訪れた時も一軒家であったことは間違いない。

一軒家の海氣館のあったところは現在千葉市の市民ギャラリーになっている。別荘式の海氣館はその裏手の松林の中にあったようであるが、往時の海氣館をしのばせるものは現在何も残っていない。

おわりに

内田百閒が房総に来た時から既に五十年以上たつ。特にこの五十年は変化が大きく、かつ速かった。房総は変わった。百閒の泊まったと思われる旅館の変遷だけを見てもそのことがよく分かる。人も変わった。百閒がもし今の時代に生きていたとして、はたしてあのような小説、随筆が書けたであろうか。百閒はいわば昔の殿様で、常にだれかが側にいて世話をする必要があった。百閒のまわりにはそういう人がいた。例えば平山三郎氏、それに二番目の奥さんである。雑賀進氏によると、二番目の奥さんは百閒と一緒になってから布団を敷いて寝たことがなかったそうである。百閒は典型的な夜型人間である。夜中でも呼ばれればすぐ対応できるように、布団も敷かず、着物を着たままで寝ていたという。今時そんな女性がいるだろうか。借金のこともそうである。百閒がしたようなのんきな（？）「借金」が今でもはたして可能であろうか。百閒は変人ではあったが、人情にはきわめて厚かった。だからこそ教え子にも慕われ、摩阿陀会のような長く続く会が生まれた。ノラという飼い猫が行方不明になった時は、何日も泣き暮らし、食事もろくにとらなかった。百閒は現在の社会でもそのような人情家でいられただろうか。世間がそれを許してくれただろうか。そんなことを考えさせられる。

それはともかく、人物、作品とも面白いことは間違いない。百閒には昭和十四年ごろと六十一年ごろと、二度ブームがあったと言われる。最近は忘れられる一方に思える。また少し注目されてもいいのではと思って、百閒を取り上げてみたのである。

（いしの　ひろし・本学人文学部国際交流学科教授）